日本医史学雑誌第五十一巻第一号　平成十七年一月二十三日受付
平成十七年三月二十日発行　平成十七年二月二十二日受理

# 近世地方藩医における文化活動と医師の教養形成

## 土浦藩医辻元順を例として

瀧澤利行

〔要旨〕本論文は、近世後期の医師における文化活動と教養形成の関係を検討することを目的としている。本論文では、近世後期土浦藩の藩医であった辻元順の生活史における文化活動と彼の教養形成の特質に焦点を当てる。辻元順は、その誠実な医療活動の傍ら、和歌、漢詩、南画、書道、茶道などの多彩な文化活動を日常的に行っていた。彼の文化活動と教養形成は、単なるディレッタンティズムにとどまるものではなく、彼自身の修養に深く結びついていたと考えられる。それは近世後期における知識人の典型的な文化的生活のあり方を示しているとみることができる。

キーワード――近世後期、藩医、医師の日常生活、文化活動、自己教養形成

## 一、緒　言

医療者の医療思想や診療態度あるいは診療技術は、その人がいかなる専門的な修練や制度的教育経験を受けてきたかに依存することはいうまでもない。しかしながら、共通の修練体系や制度的教育を得ながらも、個人によって診療態度や医療技術の水準が大きく異なることは周知の事実である。それにはその態度や技術を担う個人の知的水準や潜在的資質、動機づけ、生育環境などが関わることもまた既知の範疇に属する。この医学・医療を担う人々の診療態度や医療技術の水準に関わる医学教育的経験以外の重要な因子として、医療者の文化的・教養的水準を挙げることができる。医学教育においても医学哲学や医史学をはじめとする医学の哲学的、歴史的基盤を内容とする教育の重要性に加えて、一般教養の充実の必要が論じられていることも、そのような意識を代表しているといえる。

やや先行して結論的に筆者の問題意識を提示するならば、以下の四点に集約できる。

①医療者の医療思想や診療態度、あるいは医療技術は、その人自身の文化・教養の水準と比例する。

②医療者の文化・教養の水準はその人自身の文化的経験に依存する。

③その時代の医療の質を規定するのはその時代の文化水準である。

④広義の保健医療の成果とは人間と社会の文化的洗練の象徴である。

いうまでもなく、以上の論点は、詳細な時代的制約や地域的特性の検討を捨象した仮説的提起に過ぎない。とはいえ、医学哲学や医史学の必要が強調されながら一向に目立った進捗がない現下の状況や社会的に指摘される現代医療の問題点などとの関連は、以上の論点の成立を暗示するとはいえまいか。

これまで医師または医師集団の文化・教養水準についての研究は、医史学的接近はもとより、社会学的接近も含めて活発であったとはいえない。医師の世界の社会学的研究としては中野進の『医師の世界』[1]および『新・医師の世界』[2]が

あり、学問世界の中での医師集団の特性を記述して得るところが多い。また、職業集団としての医師世界の歴史的研究としては新村拓の『古代医療官人制の研究』[3][4]が典薬寮を中心とした医師社会の形成史を分析している。また、近世後期の在村蘭学者の学問形成や社会的活動については、田崎哲郎[5]、青木歳幸[6]が詳細な研究を行っている。

しかしながら、医師の「医業」以外の文化・教養水準を分析した研究はきわめて少ない。これは、医師たちの個人史的形成を把握する史料的制約の問題とともに、この課題についての研究的視点に立った問題構成が意識的になされてこなかったことにも由来しよう。

本論文では、筆者が把握できた土浦藩医辻元順（つじげんじゅん）の事績と、この方面での彼の生活を史料をもとにしながら、近世最後期における地方医師の文化・教養形成の実情について若干の検討を加え、前述した課題意識をさらに縦深的に考察する際の橋頭堡としたい。

辻元順を検討の事例として取り上げる理由は、以下の点にまとめることができる。

①一定の水準に達した医師の医業以外の文化・教養水準が比較的よくわかる史料が相当数現存している。彼の文人としての教養、具体的には和歌、漢詩、絵画、茶の湯といった文化内容に関わる彼の生活を一定の程度で把握することができる。

②背景となる中級武士層の生活実態を把握することができる。辻元順が属していたと考えられる近世後期における中級武士階層の平均的な教養形成のあり方を彼の生活を通して類推することが可能である。

③彼および彼の子孫が幕末から明治にかけて医師として開業していることから近代地方医師の祖型として彼らの生活をとらえることができ、近世から近代への医師の生活移行を知ることができる。

以上の点に着目し、近世後期地方藩医の生活史における文化的教養形成の実態を検討することにより、近世から近代への移行期の医師の医療観と教養形成の関連を考察する一助としたい。

## 二、辻元順の略歴と事績

### （一）辻元順の履歴[7]

辻元順（写真1）は、享和三（一八〇三）年三月十五日に常陸国安居村の村医岡本元隆の子として生まれた。同胞の有無、長幼の序は不明である。諱は安止（やすただ）という。元順、号は秋湖、竹蔭散人、青霞堂などと称した。

実家である岡本家は陸奥庄内藩酒井家の藩医というが詳細は不明である。実父の岡本元隆は、元順が建てた墓碑の墓碑銘によれば、庄内藩医の次子として生まれ、諱を知處、字を仲達、号を南嶺といった。安永年間に多紀藍溪の門に入り、後年塾長を務めたという。天明年間に多紀氏がはじめた「薬品会」において元隆の力にあずかるところが少なくなかったようである。寛政年間に採薬のために諸国を廻って常陸国新治郡三村にいたったところ、強く慰留をすすめる者があり、遂に安居村に住するようになったとされる。

写真1　辻元順画像

元順は、十八歳の時に土浦藩医であった辻益順（えきじゅん）の養子となる。養父の益順は笠間藩医佐野順に外科正骨術の皆伝を授けられている。元順が岡本家から辻家に養子に入った経緯は、推考しうるもののなお不明とせざるをえない。天保二（一八三一）年、益順が没すると益順の後をうけ辻家の家督を継ぎ、二人扶持御徒格の藩医となる。藩医としては下級身分での出仕であった。

天保四（一八三三）年の一月、三十歳の時に土浦を発ち、

二月十八日に華岡青洲の春林軒に入塾し、晩年の青洲に師事する。一年間の春林軒での修業を経て、天保五（一八三四）年、一月八日に帰藩している。天保六（一八三五）年二月二十一日に従来の扶持米二人扶持に加えて三人扶持を加増され、計五人扶持となり、殿中での格式は御広間番格となる。天保九（一八三九）年七月一日、三十六歳の時にさらに二人扶持を加増され、計七人扶持となり、御医師見習次となる。天保十四（一八四三）年八月四日、四十一歳で御医師見習となる。なお、この年に先妻の梅との間に生まれた長男安志（やすもと、玄喜）がお目見得となった。

弘化二（一八四五）年九月二十四日に、元順は四十三歳で御医師となる。嘉永二（一八五〇）十二月十五日にはさらに一人扶持を加増され、計八人扶持となる。安政四（一八五七）年四月十五日にさらに一人扶持を加増され、計九人扶持となり本道兼平脈伺（日常に他の藩医と交替で藩主一家の毎日の拝診を行う役）となる。そして、ついに慶應二（一八六六）年四月十一日、六十四歳で本道奥医師列となった。

元順はその後、慶應三（一八六七）年三月二十五日に本道兼平脈伺となった玄喜とともに、土浦藩主土屋家の医師として維新を迎える。維新後、明治三（一八七〇）年に玄喜に辻家の家督を継がしめ、元順は隠居し湖堂と号した。その後、元順、玄喜とも医業を継続していた。

明治七（一八七四）年八月十八日の「医制」の布達により東京、京都、大阪の三府に医学校の制度と、従来より開業している医師のための「試業」および仮免状の制度が設けられた。しかしながら、元順および玄喜は、地方における開業医であったため、明治九（一八七六）年一月十二日の内務省達乙第五号「医師開業試験ヲセシム」の但書「従来開業ノ医師ハ試験ヲ要セス故ニ県庁ニ於テハ新ニ免状ヲ受ケ開業スルモノト混雑セサル様処分スヘシ」の規定によって、明治十一（一八七八）年に茨城県から医師開業鑑札を受け医業にたずさわった。明治十三（一八八〇年）九月十二日、長男の玄喜が五十歳で没した。失意のうちに十一月二十七日に元順は七十八歳で没した。

元順には長男玄喜の他に、次男の玄盛、三男の元竜、そして梅の死去の後娶った後妻の芳との間にできた四男の元長

と四人の男子があったが、玄盛は山田家に養子に出し、元竜は藤田家に養子に出し、元竜は安政四（一八五七）年六月十七日に同じく土浦藩の医師見習となり、明治元（一八六八）年七月十七日に平脈伺となった。また、元長は実家の岡本家を継がしめたが明治三（一八七〇）年に二十二歳で夭折した。ために辻家は玄喜の長男安孝（やすたか、養節）が継いだ。ちなみに安孝は、明治十一（一八七八）年に前年に開学した東京大学医学部予科生徒となった。養節以後、辻家は累代土浦において医業につき、現在にいたっている。

### （二）辻元順の医業

辻元順の医業については、他に参考となる論述[8]も存在するので、ここではその所論を参照しつつ、本論文の目的とする医業以外の文化・教養と関連する事績を中心に若干の検討をおこなうにとどめる。元順は、その専科ともいうべき「本道（内科）」とともに外科をよくした。その医療には、家伝された本道の診療技術とともに、華岡青洲の春林軒での修業が大きく影響していた。元順は、師の青洲に倣って、診療録と診療図譜（アトラス）を兼ねた『寄（奇）患図下書』[9]を遺している。これは青洲の診断や治療方針を示した『奇患録』『奇患図』に影響を受けたものと思われる。辻家には岡本知斎の記した『青洲先生奇患録』[10]と赤石希笵の記した『華岡青洲先生奇患図』[11]が所蔵されている。元順は、それらの青洲の方法によりながら、『寄患図下書』を記していったものと思われる。『寄患図下書』には「骨瘤」「肉瘤」「結毒」「金瘡（創）」などの治療につき、患者の来歴、症状、治療、経過、転帰などを簡にして要を得た記述がなされている。その一節を引く。

肉瘤

谷田部侯藩（士）片山万次郎ナル者、年十七才、幼年ヨリ面部ヘ瘤ヲ発シ図ノ如ク大ニナリ来テ治ヲ求ム。通仙散ヲ

投シ薬瞑眩ノ上コロンメスヲ以テ瘤頭ヲ割キ瘤ト肉トノ分界ヲ切廻シミルニ、二分シ悪キ故小手鋏ニテ分チ見ルニ耳門ノ穴処ニ動脈アリ。是ヲ除キ頰肉ニ至レハ肉薄キ故口ノ中へ少シ切レ込ミアリ。先ツ核ヲハ徐々ニ切リ去リ創口ヲ縫合シ繃帯ノ手当シテ其日平穏ニテ安臥ス。翌日口内へ出血多分ニ有リト云。門人元悦ヲシテ遣シミセシムルニ細動脈ヨリノ出血ナル故、止血ノ手当シテ止ル。后日全治シテ帰郷ス[12]

（適宜、句読点を施した）

この症例では、華岡流の麻酔薬である通仙散を用いて施術している。手術器具も華岡流の「コロンメス」によって執刀している。このことからみても、元順が華岡外科の診療を継承していることが推察される。また、患者の容態の変化に際して、門人を差し向け診察と処置をさせているなど、誠実かつ周到な医療姿勢が窺われる。また、別の症例では、雲水僧の肉瘤切除に際し、麻酔は無意識下において心中の口外におよぶことを聞くので無麻酔で切除を希望した患者に対して、患者の希望通り無麻酔で切除におよぶなど、患者の求めにも可能な限り対応していたことは注目される。『寄患図下書』は、土浦の町医から土浦藩医へと取り立てられた養父益順、元順と続く辻家の誠実な医療姿勢を知ることができる史料でもある。

また、元順は診療技術のみならず、篤学の人であった。元順が筆写した写本として稲葉文礼『腹證奇覧』（文政五年写）[13]、橘南溪『痘瘡水鏡録』（文政六年写）[14]、『類経図翼抜書』（天保六年写、但し再写本とされる）[15]が現存する。元順が青年期から壮年期にかけての医学の修養時代に写本による独習に勤しんだ形跡を窺うことができる。

さらに、元順は貧しい村民の診療も拒むことなく応じていたようである。『寄患図下書』にも、貧民の骨疾患を通仙散を用いて外科的な切除を数回にわたって試みて治癒せしめていることが記述されており、親切な診療態度であったことがわかる。

## 三、辻元順の医業以外の教養形成

### （一）辻元順の文化的教養

医業の一方で、元順について特筆しうる点は、多面的な文化的教養をもっていたことである。一般に藩医のような中級武士層の基本的教養基盤は、儒学ないしは儒教文化であったことは周知の点である。後に再述するが、川村肇は近世後期における在村知識人層の「儒学知」の形成過程とその社会的機能について詳細に検討している[16]。その検討の対象となった歴史的事例においても知識人層の中核には在村の医師がいた。その点からみれば、元順も近世後期の地方知識人の範疇に属するといえる。

しかしながら、元順の遺した資料をみると、そこから推定される知識人像は、川村が指摘するような一定の公共的関心をもった行動を兼備した知識人像というよりはむしろいわゆる「文人的」知識人像である。いいかえるなら、元順が示しているのは、地方文人の典型としての地方医師の生活である。

元順が遺した資料から窺われる彼の文化的教養の領域は次の五領域である。

①和歌
②漢詩
③絵画
④書
⑤茶の湯

以下に各領域における元順の文化的教養の実像とその水準を検討する。

①和歌

まず、元順が最も専心したことが窺われる和歌の実像とその水準について考按する。元順の和歌は、その多くが短冊の作品として遺されている。後に見るようにかなりの能書家であった元順の手跡を窺うことができる短冊作品の中で彼の和歌の世界が展開されている。全体として自然や風景を詠んだ作が多く、澄明な印象をあたえる作が多い。いくつかの歌作を収載する。[17]

まず、現存する作の中で注目される点は、「月」を詠んだ歌が多いことである。

冬月

ふきはらふあらしのあとは雲もなく
霜にさやけき冬の夜の月

氷初結

薄氷むすひ初たる池の面は
月もさやかにすまれさりけり

月前落葉

月のすむ山の松風聲たてゝ
さとは落葉の時雨ふる也

（無題）
おもひつゝぬれはやねやにをもかけの
さすかとみれは冬の夜の月

以上の詠歌をみると、奇を衒わず、手堅い作歌を心がけながら、詩興はかまえて澄明さに重きを置いていることが察せされる。

とはいえ、一方で次のような歌も遺されている。

被知恋
包ほとさきたつ袖のうきなみた
しつめかねてそ人にしれつゝ

端然として澄明をめざした元順にしてはほのかな心境を詠んだ作といえ、仮託ではあろうが元順の詠歌が必ずしも淡色調のものばかりではないことがわかる。

また、孫の養節が東京大学医学部生徒として東京に出る際に詠んだ明治に入ってからの歌に次のような作がある。

我安志の子こたひ薬師の業をまなはんとてむさしなる都をさしてまふのほりけるによみておくりぬ
水きよきすみた川原の真白たま
家つとにとてひろえ来ませよ

我安志の子こたひ薬師の業をまなひえむとてむさしなるみやこにまふのほりけるおりによみておくりぬ
隅田川きよき流れにあそひゐて
こころの玉をみかき出せよ

この歌には孫を送り出す際に自身と同じく医を志す孫への期待と、その研鑽と大成とを願う思いが前面に出ており、自然を詠んだ元順の歌とは感興の異なる医業に対する世代継承への関心が表れており、元順が歌を日常の感情表現の手段として用いていたことがわかる。このような祝いの際などにも詠んだ歌も数首遺されており、元順が和歌を生活化していたことが窺われる。

### ②漢詩・絵画

次に漢詩と絵画についてみる。現存する元順の漢詩は少ないが、和歌よりも壮年期に創られた作が遺っている。漢詩の場合には「竹陰散人」の号を用いている。扇面に表裏に書かれた七言絶句がある。[18]

（表）昨々揚鞭呼不驚　　昨々鞭を揚げ呼ぶも驚かず
群羊多少睡難醒　　群羊多少睡りて醒め難し
祠神是似憐詞客　　祠神是れ似たり詞客を憐れむに
俄促雨師払塵清　　俄に雨師を促して塵を払いて清からしむ

（裏）奕々幽香傍砌栽　　奕々たる幽香　砌に傍ひて栽う

紫茎緑葉向春開　紫茎緑葉春に向んとして開く
晩来庭院微風（散）　晩来庭院微風散ず
吹送清香度竹来　清香を吹き送りて竹を度り来る
竹蔭散人　風下脱散字（風下散字を脱す）

ともに七言絶句として作詩されているが、表面の詩は押韻が定則を破り平仄も合っていない箇所がある。また裏面の詩は詩中に同一の字を用いている箇所が二カ所あり、これも通常の漢詩作法をはずしている。詩興も情景を描写した平凡なものである。特に裏面の詩は前二句が「蘭」、後二句が「風」を詠じており、焦点が散漫な印象を受ける。

写真 2　神農図

この詩一篇で即断することはできないが、若書きのこともあるが文人の詠ずる漢詩としては平凡で、漢詩の作法を知るも定則にはあまり意を用いず、習作の範囲であるとみられる。

また、絵画については南画の素養を感じさせる。元来、南画（南宋画）は文人画として発達し、漢詩文とともに修練される傾向にあった。元順の生きた時代の一世代前にあたる明和・安永年間に池大雅や与謝蕪村らによって大成された文人画は、文政年間に全国に広まり、田能村竹田や谷文晁、渡辺崋山らがでるにいたる。

南画の基礎的修練の画題として蘭・菊・梅・竹を四君子

と称するが、元順も墨一色の蘭を扇面画として遺している。

また、彩色された画としては、神農図、大黒天図、鍾馗図、柿本人麻呂図などを遺している（写真2）。画風は南画の基本を押さえた堅実な画風であり、大黒天図や柿本人麻呂図では飄逸とした雰囲気を醸し出す筆致をみせている。

なお、こうした修練が『寄患図下書』における患者の病態図の描画法に一定の影響を与えたことが窺える。

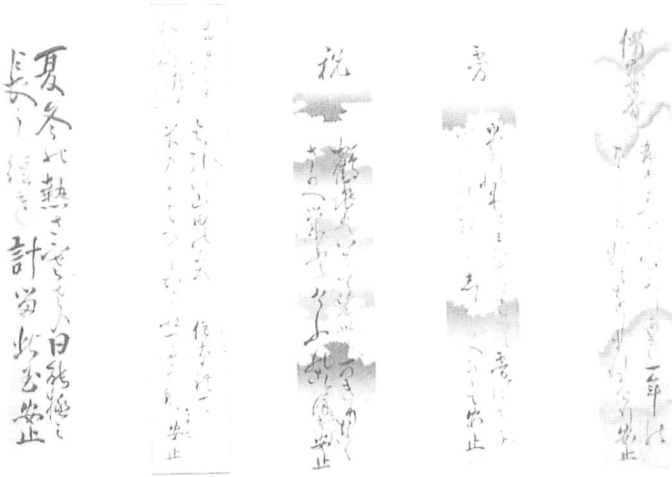

写真3　元順和歌短冊

### ③書

元順の書は、『寄患図下書』などにみられる漢字楷書と和歌短冊や書状などにみられる草体・仮名書の二種をみることができる。全体としては楷書は謹直な印象をうける書であるが、布置章法（書道においては文字の配置および全体の構成美をさす）においてやや難があるとみられる。むしろ、行草かなにおいてその本領を発揮している。特に和歌短冊においては青蓮院流（御家流）の流麗な仮名書をものしており、相当の手跡である（写真3）

### ④茶の湯

元順はまた茶の湯をよくした。流派は石州流を修めた。片桐石見守貞昌を流祖とする石州流は、貞昌が四代将軍徳川家綱の茶道指南となり、さらに貞昌の弟子が大名諸家の茶道職として迎えられたこ

とから大名茶道として発展した。土浦藩も石州流を採っていた。元順の遺した茶道関連の遺品としては、茶釜、水差、香合などの茶道具の他、数点の石州流の伝書の筆写本があり、「眞台子九段之秘事」の写本[19]もあることから、諸流派において師範級の伝承である眞台子点前の修練も行っていたことが窺われ、相当に執心し、また研鑽を積んでいたことがわかる。

## （二）辻元順の文化・教養の特徴

以上にみたように、辻元順の文化・教養は多方面におよんでいる。しかしながら、その特徴はいくつかの点に集約することができる。

第一点は、元順の文化的教養は、近世後期文人の典型的な教養内容であった。和歌、漢詩、南画、書、茶道と相互に関連する諸芸をほぼ併行して修めていたことがわかる。いうまでもなく、その興味や熟達の程度にはそれぞれ程度の差があり、元順の場合は明らかに和歌に強い関心があり、漢詩や南画については常識的な教養の範囲内であったといえるが、彼が遺した作品などからは、単なる道楽にとどまらない真摯な修練の軌跡が窺われる。その医業と同様に実直に修業したものと思われる。

第二点として、その文化的教養にはある種の修養的性格が認められる。その一側面は本業である医業との関連性にみることができる。画題を神農図や鍾馗図など医や病魔除けなどとの関連で選んでいる点などは、文人趣味としての絵画にとどまらず、どこか医業の修養的要素を思わせる。いうまでもなく、元順自身がそのようにとらえていたか否かは定かではない。

第三点は、元順自身が常陸国の文人による文化的サークルの一つの核であったとみられる点である。土浦周辺の文人との交流を推測させるのは、常陸周辺の文人の詩作や扁額、揮毫などを元順が遺しているとともに、色紙短冊貼交屏風

など、周辺の文人がものした作品を集めた趣味豊かな文物を遺しており、文人同士の交友の中心に元順がいたことを物語っている。

第四点は世代継承性である。和歌の素養は元順から玄喜へと伝えられ、玄喜も和歌数首を遺しており、父の影響を受けたものと思われる。蓋し元順は玄喜に対して医業の継承者として一定の教養形成を要求したものとも推察される。

このように、近世後期地方医師としての元順における教養形成の軌跡は、地域差の観点からみて一般化はできないにしても、近世後期地方医師がどのような知的・文化的環境の中で生き、そうした文化的環境からの影響をいかにして内在化し人間形成を遂げていったかを知る上で重要な意義を有していると思われる。

## 四、近世後期の医師にとっての文化・教養

以上にみた辻元順の教養形成のあり方を参照枠とした場合、当時の医師のあり方に関する見解からみて、それはどのように評価されたのであろうか。いいかえれば、元順の教養形成は、医師としての元順にとってどのような評価をもたらしえたのか。

貝原益軒は、『養生訓』において、医師はまず「文義」に通じなければならないとして、つぎのように論じている。

凡（そ）医となる者は、先儒書をよみ、文義に通ずべし。文義通ぜざれば、医書をよむちからなくして、医学なりがたし。又経伝の義理に通ずれば、医術の義理を知りやすし。

故に孫思邈曰、「凡そ大医たるには先づ儒書に通ずべし」（と）。又曰、「易を知らざれば、以て医となるべからず」（と）。此言、信ずべし。諸芸をまなぶに、皆文学を本とすべし、文学なければ、わざ熟しても理にくらく、術ひきし。ひが事多けれど、無学にてはわがあやまりをしらず。医を学ぶに、殊に文学を基とすべし。文学なければ医書を

よみがたし。[20]

この節において、益軒は、医学を学ぶためにはまず儒学と易を学ぶべきことを論じているが、その前提として「文学」に通じることを主張している。この場合、文学とは必ずしも文芸のみにとどまらず、広く書物を読解することと解すべきであろう。益軒は、自分の見間違いも多いだろうが、少なくとも無学では自分の誤りすらわからないであろうと述べている。この点からみて、益軒が医師にとって広い意味での「文学」が必須の教養であると考えているとしてよいだろう。

では、元順が嗜んだ和歌や漢詩、絵画、書、茶の湯といった諸芸を医師が身につけようとすることについてはどのように理解されたか。

この点については、なお十分な精査が及んでいるわけではないが、管見では必ずしもそのことが高く評価されていたとはいえない。

尾張藩藩医浅井南暝の門人で梅毒の治療書『黴瘡約言』の著者としても知られる浅井南皋（一七六〇～一八二六）は、その著書『養生録』において次のように医師像の批判を行っている。

一　凡医を択ふ（に）博識多才の学医を必よしとすべからず世間流行の時医も亦よしとすべからず、尚更無学文盲にて世上の交善し佞弁利口の輩などは論するにたらず只大胆小心にして精意精術の人善とすべし

一　惣じて医術は精しきを尊ふ博学多才を貴ばず多芸にして俗事によくわたるを貴ばず世家にして強大なるを貴ばす唯々医術のみに深切にして朝夕煉磨の功を積たるをよしとす[21]

ここで着目すべきは、南皋が医師の「博識（学）多才」の「学医」を否定的にみており、「多芸」と「俗事によくわたる」ことを排していることである。もちろん益軒と同様に「無学」な者は当然にして論外であるが、さりながら博学多才もまた良医の条件とはいえないとする。

益軒と南皋とに共通する見解は、「医術への専心」であった。益軒は「凡（そ）医は医道に専一なるべし」と明言する。白杉悦雄は「庸医」と題する論考において、近世中期から後期にかけての庸医のとらえ方に関する諸記述をとりあげているが[22]、それらは南皋が指摘する「世間流行の時医」や「佞弁利口の輩」と同様の状況を批判するものである。この点からみて、医術への専心こそが医師の専務であって、他の才芸にその意が及ぶことは医師として採るべきところではないとの考え方は、近世後期においてもほぼ普遍的な見解としてとらえられていたとみてよい。

しかしながら、元順が展開していたいわば古典的文化・教養の世界は、一方では南皋がいう「博識（学）多才」と解される側面をもちながら、他方でそれらが「佞弁利口」に通ずる世俗化された遊芸とは異なるきわめて高い「修養的」要素をもっていたことが、これまでみた元順の医業の一端と教養の関係性からみても十分察せられる。元順の修めた教養内容は、単に医業の傍らで趣味として行われていた水準を超え、彼の生きる日々において生活化されたものであったといえる。いうまでもなく、客観化された関係性は提示できないが、元順にみられる医業や患者への誠実さは、彼の医学修業のもつ意味とともに、文化的教養形成の蓄積が彼の医学への修養に大きく影響したことは想像の域を一歩超えるものであるとすることができまいか。

川村肇は、在村知識人の儒学教養の形成過程を明らかにしながら、彼らの修得した「儒学知」がさまざまな社会意識や村落共同体の形成と発展への志向を培ったことを論証している[23]。川村が取り上げている在村知識人は、その少なからぬ者が在村医師であったことから、本稿と時代を同じくする医師の教養水準は、地方共同体社会の形成に一定の影響をあたえたことを示唆するものとなっている。

元順は、土浦の地方都市の藩医であり、川村の論ずる医師群とは異なる社会基盤をもっていることから、単純な類比は避けなければならないが、近世後期地方医師の自己形成を考察する際に、医師のもつ医学以外の教養が社会に対して開かれた可能性を示す場合とともに、医師の内面的修養に作用して医師としての人間形成において価値的な影響を及ぼすこともまた顧慮すべき論点であるといえる。

## 五、結語　――医師の知は医学のみか――

本稿では、近世後期の土浦藩医辻元順の文化的教養形成の軌跡をみることにより、その教養内容の水準についての若干の考察とそれがもたらす医師としての自己形成あるいは修養的要素との関連を検討した。その結果、近世後期医師の生活世界における教養内容には医学以外のさまざまな文化内容が含まれることが例示されるとともに、それがその者自身の修養に影響をおよぼし、世代継承性をも含んでいることを示すことができた。ここで、緒言に示した医師の文化・教養と水準と医療に関する四点の仮説のうち、

①医療者の医療思想や診療態度、あるいは医療技術は、その人自身の文化・教養の水準と比例する。

②医療者の文化・教養の水準はその人自身の文化的経験に依存する。

の二点については、一定の程度でその妥当性を例証することができたと考える。

元順の例にみるように、幅広い教養と自然や人間、社会への研ぎ澄まされた感覚こそが患者を診る眼を豊かにしていくことは、医療のあり方の本質を支える経験であるとともに、近世後期における医師のあり方のみならず、普遍的な医療従事者にとっての文化的経験の重要性を意味している。

その意味で、辻元順の生き方は、医療者にとっての文化的教養のあり方を示範しているといえよう。なお、緒言で示した残る二点、すなわち

③その時代の医療の質を規定するのはその時代の文化水準である。
④広義の保健医療の成果とは人間と社会の文化的洗練の象徴である。

については、本稿の結論と論理的には通じていると考えているが、詳細な論証は他の多くの社会的慣習などの要因も検討する必要があり、他日を期したい。

本稿の要旨は平成十六年十二月十八日の日本医史学会・日本歯科医史学会・日本獣医史学会の合同例会で発表した。

## 謝辞

本稿の作成にあたっては土浦市立博物館の木塚久仁子学芸員その他土浦市立博物館の方々に多大な援助をいただきました。ここに記して念といたします。

## 文献・注

（1）中野進『医師の世界』勁草書房、東京、一九七六
（2）中野進『新・医師の世界　その社会学的分析』勁草書房、東京、一九九六
（3）新村拓『古代医療官人制の研究　典薬寮の構造』法政大学出版会、東京、一九八三
（4）新村拓『日本医療社会史の研究　古代中世の民衆生活と医療』法政大学出版会、東京、一九八五
（5）田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版、東京、一九八五
（6）青木歳幸『在村蘭学の研究』思文閣出版、京都、一九九八
（7）辻元順の履歴事項は、国立国文学資料館史料館常陸国土屋家文書「土浦分限帳」（資料番号三三〇）、「家中年譜」（資料番号五九六）の翻刻によった。
（8）土浦藩の藩医の活動については、石塚眞『土浦藩の医師たち』筑波書林、茨城、一九九六。辻家の医業については、長田

直子「幕末期土浦藩の一側面―辻家医療の記録から」（土浦市立博物館編『土浦藩医辻元順』、四八―五四頁、土浦市立博物館、茨城、二〇〇四）

（9）辻家資料、土浦市立博物館寄託『寄患図下書』

（10）辻家資料、土浦市立博物館寄託『華岡青洲先生奇患図』（赤石希范識）、一八〇九―一八一〇

（11）辻家資料、土浦市立博物館寄託『青洲先生奇患録』（岡本知斎写本）

（12）前掲書（8）、「肉瘤」の項

（13）辻家資料、土浦市立博物館寄託『腹証奇覧』（写本）、原著の稲葉文礼『腹証奇覧』は正編が享和元年（一八〇一）刊、後編が文化六年（一八〇九）刊。日本における古方派の代表的腹診書とされる（小曽戸洋『日本漢方典籍辞典』大修館書店、東京、一九九九）

（14）辻家資料、土浦市立博物館寄託『痘瘡水鏡録』（写本）、原著の橘南溪（一七五三―一八〇五）は古方派の人で『傷寒論』の研究者として知られた。『傷寒外伝』（寛政八年）などの著述がある（小曽戸、前掲書）。

（15）辻家資料、土浦市立博物館寄託『類経図翼抜書』（再写本）、張介賓『類経図翼』からの抜粋写本である。

（16）川村肇『在村知識人の儒学』思文閣出版、京都、一九九六

（17）現存の和歌短冊は、すべて辻家資料、土浦市立博物館寄託

（18）現存の扇面は、辻家資料、土浦市立博物館寄託

（19）辻家資料、土浦市立博物館寄託、石州流「眞台子九段之秘事」

（20）貝原益軒『養生訓』一七一三（石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』、一二五頁、岩波書店、東京、一九六一）

（21）淺井南皋『養生録』、巻之中、筑波大学附属図書館蔵本、一八一七

（22）白杉悦雄「庸医」（吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』、九五―一一三頁、思文閣出版、京都、二〇〇一

（23）川村、前掲書（15）

（茨城大学教育学部）

# Self-Cultivation and Cultural Activities of a Rural Doctor of the Late Edo Era
## The Example of TSUJI Genjun

Toshiyuki TAKIZAWA

This monograph aims to clarify the relation of the self-cultivation of a traditional doctor to his cultural activities in rural society in the late EDO era. The author considered the life history of TSUJI Genjun (a court surgeon of the TSUCHIURA Han- one of the feudal clans under the TOKUGAWA shogunate), especially in regard to his rural cultural activities. While pursuing his sincere medical work, Genjun intently practiced various forms of traditional culture work, for example, tanka poetry, Chinese poetry, southern school Chinese painting, Japanese calligraphy, and tea ceremony. A characteristic of his cultural practices is the fact that he was not only a dilettante but was also self-cultured. Genjun's cultural life and his activities show a typical pattern of rural intellectuals.